

「仕事ができる社員、できない社員」という本からです  
得意・不得意がはっきりしている人 どんな難問も小さく分ければ必ず解ける

中学時代、もしくは高校時代、試験を受けるとき「簡単な問題からやりなさい」と教わった記憶はないでしょうか。つまり、苦手な問題は後回しにして、必ず解決でき、点数が見込め、それにかかる時間が読める問題から取りかかるとが点数を上げるコツでした。それと同時に、解ける問題から取りかかるとは、それによって心の安定を図れるからです。試験においては冷静さを失わないことが重要であり、焦ったら終わりです。凡ミスさえ起こしかねません。だから、できるところから取りかかったほうがいいわけです。

考えてみると、ここでいう「苦手な問題」とは、「その人にとっては難しい問題である」という意味です。つまり、苦手意識があるから苦手なのであって、その意識を持たないようにすればいいのです。もっといえば、得意になってしまえば、苦手なことはなくなってしまうのです。今まで苦手だと思っていたこと、難問だと感じることに對して、まずは興味を持ってみてください。そこに何か面白いことがあると信じて、向き合ってみるのです。もし難問が解決したときには、その喜びをかみしめて記憶に刻みます。そうして、自分の中の「苦手なこと」のカテゴリの中から、少しずつ「得意なこと」のカテゴリへと移し替えていくことです。人は難題を前にすると逃げ腰になります。解決しようと挑戦せずにあきらめてしまうこともあります。そして、一度その問題に背を向けてしまうと、それがとてつもなく大きな問題で、決して解くことのできない難問であるかのように思えて仕方がなくなります。ところが、問題にちゃんと向き合っ、分析して、分解して小さな問題に分けて考え、一つひとつを丁寧に解いていけば、解決できない問題ではないとわかることが多いのです。どうすれば解決できるのか考え続け、解き続けることができる人は、苦手なことなどなくなるはずで、試験では難問にも立ち向かえるのは、制限時間という「デッドライン」があるからです。仕事でも同じで、仕事におけるどんな問題も、デッドラインを引いておかなければそのまま放置されてしまいます。そして、放置された問題は、さらに他の問題とつながり、大きくなって、根の深い問題へと発展してしまうのです。大きなトラブルが起こってしまった、取り返しのつかないミスをしてしまったとき、原因の大元はもともと小さな問題であり、難問に見えたものを見て見ぬふりをしてしまったことにあるものです。

根の深い問題は「与件」となります。問題を放置することで、本来は存在しなかった与件を、あえて自ら作り出すこととなります。一度与件となったものはなかなか変更できません。たとえば、メールの処理を苦手としている人が、なぜ苦手なのか考えたり、得意になるための努力をしたりしなければ、永遠にメールの処理に苦しめられることになるでしょう。そこから抜け出せなくなり、メールの返信に時間がかかることを考慮したうえで、他の仕事の計画を立てなければならなくなります。

「得意だから」「苦手だから」という理由で仕事を選んだり、仕事の順番を決めたりすると、仕事の効率を悪くします。あくまでデッドラインを基準に仕事のやり方を決めるのが、仕事ができる人の鉄則です。もちろん、与件の中には自分の力では変えようのない事情もあります。やる気のない上司や、会社の古い体質などは一朝一夕にはどうにもなりません。しかし、それ以外の与件をつくらないようにすることはできます。苦手なことを得意なことへと変えていく努力もその一つであり、これができる人とできない人の差は、いずれ仕事において大きな差となるのです。苦手なことを苦手なままにしておかない。それが仕事ができる社員です。そして、人の上に立てる資質を自分の中に育てられる人です。

放置された問題はどうなっていくと言っていますか？

(

)